

2020 オンラインスピーチ大会の試み
-人とのつながりを意識した活動を目指して-
半沢千絵美、金蘭美（横浜国立大学）

2020 Online Speech Contest: Connecting People through the Event

Chiemi HANZAWA Ranmi KIM, Yokohama National University

要旨：本発表では、2020 年度に実施した留学生によるオンライン日本語スピーチ大会の試みについて報告し、オンライン化によってどのようなことが可能になったか、そして今回の経験をどのように活かせるのか議論する。過去 9 年間継続してきたスピーチ大会をオンライン化するにあたり、開催方法、事前録画の方法、審査方法、登壇者の支援の方法を再検討する必要があった。留学生のスピーチをインターネットで配信するだけでなく、どのようなオンラインツールを用いればより多くの方がアクセスでき、留学生との交流が可能になるのか検討しスピーチ大会を実施した結果、通常のスピーチ大会では得られなかったつながりを得ることが可能となった。

キーワード：日本語スピーチ大会、留学生、オンラインイベント、留学生支援

1. はじめに

横浜国立大学では、2011 年度より毎年留学生による日本語スピーチ大会が開催されている。例年 10 名程度の留学生が、その年のテーマに沿ったスピーチを聴衆の前で披露し、学内および学外審査員による審査を経て受賞者を決定するイベントである。2020 年度の大会は、新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、学内での開催ができなくなり、オンラインにて開催することとなった。本発表では、オンライン日本語スピーチ大会の実践方法を報告し、オンライン化によってどのようなことが可能になったか、今回の経験を今後どのように活かせるのかを議論する。

2. YNU 日本語スピーチ大会の目的と概要

「YNU 日本語スピーチ大会」と称される本学の日本語スピーチ大会は、もともと経営学部で行われていたイベントであったが、2011 年度より国際戦略推進機構日本語教育部が主催で全学の留学生を対象とすることになり、その後は毎年規模を大きくしながら継続されている。

YNU 日本語スピーチ大会開催の主な目的は、1) 留学生の日頃の日本語学習の成果を学内外の方々に発表する機会を作ること、2) 学内の留学生と日本人学生との交流を促進することである。前者については、学内の学生および教職員だけではなく、本学留学生の支援に携わっている地域の方々に留学生の思いを伝えることで、相互理解・異文化理解を促

すという意義がある。後者は本学日本語スピーチ大会の特徴でもあるが、全学教育科目（教養教育科目）を受講する日本人学生や先輩留学生が、スピーチ原稿の推敲やスピーチの練習の支援をするという試みである。この活動は 2014 年度から始まっており、普段日本人学生と留学生の交流が十分ではないと言われている中、日本人学生と留学生の交流のきっかけを作るのが目的である。また、それだけではなく、日本人学生が、自身の母語である日本語を、留学生の目を通して客観的に捉えられるようになることも目的としている（半沢 2018）。

3. 2020 年度 YNU オンライン日本語スピーチ大会開催の目的

YNU 日本語スピーチ大会の開催は必須ではなく、全面中止という選択肢もあったわけであるが、オンラインという形で実施したのには、上記の 2 つの目的に加え、コロナ禍で学習意欲が低下していたり、気持ちが落ち込んでいる留学生を励まし、支援する側の学生たちにもオンラインでできる活動の機会を与えたいという思いからである。また、母国に帰り日本に戻って来られない学生や、まだ入国ができていない留学生にも参加できるイベントの機会を提供するという点からも、オンラインで日本語スピーチ大会の実施を継続させることは意義があると考えた。さらには、オンライン日本語スピーチ大会の開催によって、留学生の存在を学内外の人々に知らせることも重要な目的であり、留学生の存在をアピールすることで、コロナ禍でも留学生と学内外の人々との交流を促進できるのではないかと考えた。

4 YNU オンライン日本語スピーチ大会の概要

以下の表 1 は 2020 年度 YNU オンライン日本語スピーチ大会の開催方法をまとめたものである。2020 年度のスピーチ大会には初中級の部に 3 名、中上級の部に 7 名の留学生が登壇した。

本学でのオンライン日本語スピーチ大会の開催は初めてであり、また他機関での実践例も少ないことから、開催するにあたり検討が必要な項目は多岐にわたったが、主な検討項目を以下にまとめる。

4.1 開催方法

オンラインでスピーチ大会を開催する方法として、リアルタイム方式とオンデマンド方式が考えられるが、今回はオンデマンド方式を採用した。リアルタイム方式のよさとしては、対面で開催するスピーチ大会同様、スピーチをする留学生と「場」の共有ができ、留学生たちの思いを緊張感も含め感じ取ることができるという点がある。さらには、実施に関してもオンライン授業やオンラインセミナーのノウハウを活かせるという点も魅力であった。しかしながら、そのようなメリットを認識しながらもスピーチを事前録画し、視聴してもらうオンデマンド方式を採用した理由は、新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、

表 1： 2020 年度 YNU オンライン日本語スピーチ大会の概要

テーマ	「私にとっての 2020」
応募資格	横浜国立大学に所属している留学生であれば、居住地は問わない
日本語のレベルによる カテゴリー	初中級の部と中上級の部
書類審査	スピーチしたい内容の要旨を 200 字程度にまとめて応募時に提出、日本語教育部で審査を実施
開催方法	事前に録画したスピーチを YouTube にアップロードし、YNU オンライン日本語スピーチ大会特設ページに掲載し、期間限定で視聴してもらう
特設ページの概要	トップページ - スピーチ大会趣旨 - 国際教育センター長挨拶（動画） - 特設ページの説明 - 一般投票へのリンク（投票可能な日は 2 日間のみとした） レベル別ページ - サポーターによる留学生紹介 - スピーチ動画 - 応援メッセージへのリンク
審査方法	学内外の審査員 6 名が事前に動画を視聴し、個別に評価をした上で審査会議を実施、入賞者を決定
表彰式	審査会議の翌日に Zoom によるオンライン表彰式を開催

トラブルの対応等リアルタイムイベントを運営するスタッフの確保の問題、登壇を希望する留学生の居住地や Wi-Fi 環境が登壇留学生募集の時点では予測ができない点が主なものであった。さらには、例年スピーチ大会を視聴しに来場して下さる地域の方々にとってのイベントへのアクセスのしやすさということも重視した。リアルタイムで開催する場合は、ビデオ会議システム Zoom での開催を視野に入れていたが、オンライン授業やセミナーに参加した経験がない人にとって、Zoom 会議への参加は難しいのではないかと考えた。その点、動画共有サービスである YouTube は広く認識されているツールであり、実際に利用したことがある人も多いであろうと考えた。そこで、事前録画したスピーチを YouTube にアップロードし、YNU オンライン日本語スピーチ大会特設ページを作成、YouTube リンクをサムネイルとともに埋め込む形で配信することにした。また、オンラインであっても視聴者が積極的に登壇留学生と関わられるように、特設ページでは、視聴者からの応援メッセージの募集と、どのスピーチがもっともよかったかを問う一般投票もでき

るように仕様を工夫した。

4.2 スピーチの事前録画

開催方法が決定した後は、スピーチの録画方法を検討した。審査の際の公平性を考えると、登壇留学生を学内に集めて、スタッフの目が届く中で撮影する方法が望ましいと思われたが、海外に居住する登壇者にはそれが不可能であること、また新型コロナウイルスの感染状況によっては学内での撮影もできなくなる可能性があることから、スピーチは自宅で撮影しても、学内での撮影に参加してもよいこととした。最終的には、10名の登壇者のうち、4名が学内での撮影を希望し、感染防止対策を施した上で学内施設で実施した。

4.3 審査方法と表彰式の開催

審査の方法については、審査員の都合に合わせて各自でスピーチ動画を視聴してもらうのが効率的ではないかと考えた。YNU オンライン日本語スピーチ大会特設ページが公開になった後、審査員にもページの URL を知らせ、それぞれのスピーチの評価（点数）を Microsoft Forms で作成したアンケートに入力してもらった。審査会議は後日 Zoom を用いて開催し、審査員が提出した評価を画面上で共有しながら入賞者を決定した。

通常のスピーチ大会では、審査員は留学生のスピーチを聞いてその場で評価をし、15分程度の審査会議を経て入賞者を決めるという方法を採用しており、時間に余裕がなかったが、今回は審査会議に十分な時間を使うことができ、丁寧な審査ができたという印象がある。

表彰式は審査会議の翌日の昼休みの時間帯に Zoom を用いてオンラインで実施した。当初は表彰式を企画していなかったため、学外に周知することはせず、登壇留学生、サポーター、審査員、関係教職員の参加となった。

4.4 全学教育科目受講生による支援

YNU 日本語スピーチ大会の特徴でもある、学生によるスピーチ大会支援についてもさまざまな検討が必要となった。例年、全学教育科目である「国際理解：国際交流における日本語の役割」の受講生が、サポーターとして、登壇留学生のスピーチ原稿の推敲やスピーチの練習を手伝うほか、スピーチ大会当日には支援した留学生を紹介したり、スピーチ大会の運営にも関わっている。

スピーチ大会をオンラインで実施することに伴い、当日の運営に関わるという役割はなくなってしまったが、なるべくこれまでと変わらない活動ができるよう方法を検討した。2020年度の当該科目の受講生は11名だったため、ほぼ1対1で登壇留学生の支援を行うことになった。なるべく支援する側とされる側の関係構築がスムーズに進むように、所属学部や話せる言語等を考慮して組み合わせを決定した。Zoom を用いて、授業内でお互いが顔を合わせる機会を作り、その後は各自で Zoom や LINE を使ってやりとりをしてもら

うよう指示をしたが、その際にメールやテキストメッセージだけのやりとりとならないように、ビデオ通話を用いた支援を含めることを必須とした。

通常のスピーチ大会では、登壇留學生がスピーチをする直前に、サポーターが 30 秒程度で留學生を紹介しているが、今回は紹介文を書面で提出してもらい、特設ページに掲載した。なお、紹介文は、留學生の趣味や日本留学のきっかけ、またはスピーチに込めた思いなど、サポーターだからこそ知り得た情報を入れるようアドバイスした。

5. YNU オンライン日本語スピーチ大会ふりかえり

これまでは視聴者が目の前にいる中で行っていた日本語スピーチ大会を、予期せぬ形でオンライン化することになったが、オンランだからこそ得られたメリットも感じられた。以下、スピーチ大会実施後の反響や感想、そして今後の活動についてまとめる。

5.1 視聴者数と反響

スピーチ動画の配信を行った YouTube の機能で視聴者数を調べたところ、一般投票の期間として設定した 2 日間の視聴者数は登壇者によって 92 回から 394 回と幅があったが、平均 167 回であった。一般投票については、初中級の部には 73 票、中上級の部には 111 票が寄せられた。一般投票とともに掲載した YNU オンライン日本語スピーチ大会に関するアンケートには 63 の回答が寄せられ、そのうち 33 回答の所属は「学外」であり、学外の方々にも十分アクセスができるイベントであったことがうかがえた。また、アンケートでは、YNU 日本語スピーチ大会の視聴経験があるかも質問しているが、63 名中 42 名が初めての視聴という回答であった。

YNU オンライン日本語スピーチ大会に関する感想・意見は、学内の教職員や学生、そして学外の視聴者合計 18 名から寄せられた。いずれも登壇した留學生のスピーチやスピーチ大会の開催に関して好意的なコメントであった。

各登壇者に向けた応援メッセージは、合計 211 件寄せられた。学内外の多くの方々がメッセージを残してくれたわけだが、印象的だったのは本人の所属する学部の教職員や、国内外の本人の友人であろうと思われる方々からの温かいメッセージであった。応援メッセージの募集については通常の対面のスピーチ大会では実施していなかったが、留學生が自分のスピーチに込めたメッセージに対する反応を、目に見える形で受け取ることができたという点はオンラインツールを用いたメリットであったと考える。

5.2 登壇留學生とサポーターからの感想

登壇した留學生にスピーチ大会後にアンケートを実施し、スピーチ大会に参加した感想を聞いたところ 10 名中 7 名は「とてもよかった」、3 名は「よかった」と回答していた。感想からは「チャレンジできた」「自分の考えが伝えられた」「海外からでも参加できた」と企画側の意図していた成果があらわれていた。サポーターによる支援についても「勉強

になった」「役に立った」「友人ができた」と好意的なものばかりであった。

サポーターとなった学生からも、「留学生と交流できてよかった」「留学生の姿勢に刺激を受けた」「日本語について考えるきっかけとなった」と好意的な感想が多かった一方で、日本語を指導することの難しさや、もっと練習すべきだったという声も聞かれた。

6. まとめと今後のスピーチ大会の実施に向けて

オンライン日本語スピーチ大会をオンデマンド方式で実施するにあたり、通常のスピーチ大会のように多くの方に視聴してもらえるのか、留学生のスピーチに対して反響が得られるのか不安があった。しかしながら、実施をしてみたところ、視聴者数という数字をもとに考えるといつも以上の数の方々に留学生のスピーチを聞いてもらえたことが明らかになった。

オンデマンド方式を採用したことによって、留学生がリアルタイムでスピーチする「場」を共有することはできなくなってしまったが、通常のスピーチ大会には来場できない方々と留学生のスピーチを共有できたことは、留学生本人にとっても、また運営側にとっても大きな収穫であったと考える。また、オンラインによる開催であっても、工夫次第で登壇者と視聴者をつなげることは可能であることがわかった。特に、登壇者への応援メッセージの試みは、視聴者の声が直接届くという点で、今回の大会の目的の一つであった、留学生と学内外の方々の交流を促進することにもつながったのではないだろうか。

オンラインスピーチ大会を開催するにあたって、どのオンラインツールを用いて、どのようにスピーチを発信するか検討することは、運営側が留学生のスピーチをだれに届けたのか、そして、どうすれば届けられるのかを考えるきっかけとなった。

今後のスピーチ大会に関しては、対面で開催したあとに、動画を配信して応援メッセージを受け付ける等、対面・オンライン双方の利点をうまく取り入れる形で実施ができないか検討をしている。また、今回 Zoom や LINE 等、学生が普段使っているオンラインツールを用いて留学生の支援体制が築けることも明らかになったことから、今後のサポート体制作りを見直していきたいと考えている。

参考文献

半沢千絵美 2018. 「留学生支援の場としての日本語スピーチ大会-留学生と日本人学生の異文化間教育の試み-」, 『ときわの杜論叢』5 巻, 30-40.